



3. 安心を実感できる保健・医療・福祉のまちづくり



3. 安心を実感できる保健・医療・福祉のまちづくり

1. 新病院の建設と医療体制の整備・充実

- 旧公立志津川病院及び町内の開業診療所が全て流出、医療機能が完全に失われ、医療体制を抜本から見直すことになった。
- 平成24(2012)年度に新病院の基本計画策定に着手、平成27(2015)年12月14日に、「南三陸病院・総合ケアセンター南三陸」がオープンした。
- 建設費用は台湾紅十字からも大きな支援を受けた。
- 再建までの間、近隣の医療機関からも支援を受けて医療体制を維持した。

旧公立志津川病院の被災と医療体制の維持

南三陸町から周辺の中核的な病院へは40kmの距離があり、通院には1時間程度を要する。震災前の旧公立志津川病院は地域で唯一の病院として、高齢化に対応した急性期疾患と慢性期疾患を対象としたケアミックスを目指し、一般病床と医療型療養病床を合わせて126床を有していた。

東日本大震災の津波により、旧公立志津川病院は5階建ての4階まで浸水。町内の開業診療所6施設も全て流出したため、町は全ての医療機関を失った。

被災直後はDMAT（災害派遣医療チーム）やイスラエル医療団による医療支援を仰ぎ、4月15日からは「公立志津川病院仮設診療所」を開設、外来診療を再開した。また、登米市立よねやま病院（現よねやま診療所）の一部を借り受け「公立志津川病院」として新たに発足、入院受入れを開始した。



被災した公立志津川病院

新病院の構想

平成24年7月に南三陸町病院建設基本計画策定委員会を立ち上げ、有識者委員や町民代表委員からの意見や助言を得て、平成25(2013)年1月に「南三陸町病院建設基本計画」を策定した。「南三陸町から病院をなくしてはいけない」という基本的な考え方のもと、外来診療課9科、入院病床数90床、救急医療の確保を目指した計画であった。

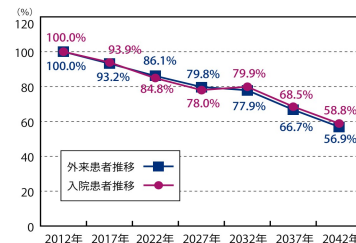
病床数は将来患者推計を踏まえた適正数に設定した。当町が属する気仙沼医療圏は宮城県全域と比較して人口密度が低く、高齢化率は県内で2番目に高いこと、出生率は最も低く、死亡率は栗原・登米医療圏に次いで3番目に高いこと、町の人口は30年後には50%以下、高齢化率は45%となることが予測されていたことから、長期的な視野で被災前より少なく設定された。また、人口10万人当たりの一般病床数は県全域と比較してやや多いが、療養病床数では県内2番目に少なく、病床利用率も平均在院日数も県内でも高かった。このことから、一般病床40床、医療療養病床50床の計90床とした。今後の高齢化を見据え「りあす訪問看護ステーション」も院内に設置している。

また、同じ敷地内に隣接して地域福祉を担う総合ケアセンター南三陸を併設する計画とした。両施設は町民が安心して暮らし続けるために最も重要なものであり、再建される公共施設の第1号として復興の象徴となることが期待された。最終的に両施設の玄関口がシンボル空間である「みなさん通り」で繋がれた構成となり、利用者やスタッフが両施設を気軽に行き来して、機能を効率的に利用できるものとなった。

厚労省及び県の調査によれば、気仙沼医療圏における医療従事者数は県全域と比較して少なく、特にリハビリテーション提供に関わる医療従事者が少ない。医療従事者の人材確保を今後の課題としている。

■南三陸町の将来患者推計

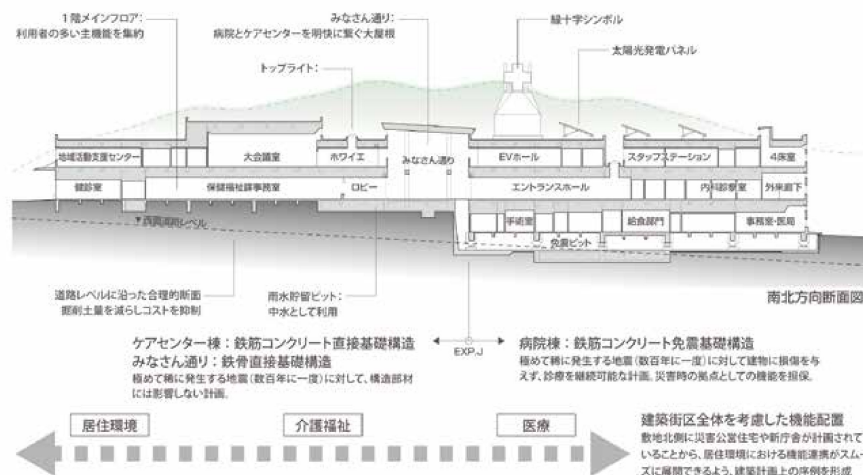
（平成24年（2012年）を100%とした場合）



南三陸病院・総合ケアセンター南三陸 外観

■配置断面構成

- ・造成前の山並みを大切にした建物配置、山肌を連想させる外壁
- ・強固な岩盤、大地に根ざす公共建築に相応しい佇まい
- ・明快な階構成と管理区分、機能連携しやすい配置



【新病院の基本的な考え方】

〈基本理念〉

質の高い医療、介護サービスを提供し、地域住民が安心して社会生活を送れるよう、信頼され親しまれる病院を目指します。

〈基本方針〉

- 地域医療の基幹病院として、住民の医療、介護及び健康維持・増進に努めます。
- 地域医療の発展充実に寄与するため、病診・病病連携を積極的に推進します。
- 地域の保健、医療、福祉機関との連携を円滑にし、在宅医療を含めた調和の取れたサービスを提供します。
- 患者様のアメニティ向上、プライバシーの保護及びインフォームド・コンセントの徹底を図り、安心と満足を提供します。
- チーム医療を実践し、患者様及びご家族のQOL向上を図ります。
- 公務員としての自覚を持ち研鑽に努め、安心して自信を持って働ける明るい病院を目指します。
- 全職員は常に業務効率の向上を図り、安定経営に努めます。

第1章 安心して暮らし続けられるまちづくり

用地確保と建設工事

新病院の立地は志津川地区中心市街地の都市計画に基づいて志津川地区の高台に造成された用地であり、防災集団移転促進事業、災害公営住宅整備事業と併せて計画された。平成27(2015)年度から順次、宅地の引き渡し及び人居が始まったのに合わせ、年内12月のオープンに向けて工事が進められた。斜面の傾斜を利用し、総合ケアセンターと病院をつなぐ「みなさん通り」や、病院エントランスホール・受付を含む外来診療機能を2階に配した計画となっており、土地の形状に合わせることで工期の短縮や工費の節約を可能にした。

■周辺案内図



造成工事

「南三陸町病院事業改革プラン」と
運営体制の整備

オープン翌年の平成28(2016)年度から平成32年度(令和2(2020)年度)を対象期間とし、南三陸病院の基本的な運営方針である「南三陸町病院事業改革プラン」が策定された。少子高齢化の急速な進行、医師や看護師等医療技術員の不足など医療を取り巻く環境が大きく変化していく中でも、安全安心な地域医療を持続的に提供し続けることができるよう、南三陸町第2次総合計画、病院建設基本計画、宮城県による地域医療構想などを踏まえ、南三陸病院が担うべき役割の明確化や効率化などについて具体的な数値目標と取組内容を定めた。町内唯一の病院として、身近な医療の提供と周辺中核病院への橋渡し及び中核病院から自宅へ復帰するまでのフォローを使命とし、(1)地域医療構想を踏まえた役割の明確化、(2)経営の効率化、(3)再編・ネットワーク化、(4)経営形態の見直し、の4つの柱を設定。毎年9月の決算認定とともに検証を行い、検証結果について12月に公表した。対象期間終了後、令和2年度からの新型コロナウイルス感染症流行のために新計画の策定が遅れたが、令和5(2023)年度に経営強化プランを策定し、特に経営状況の安定に重点的に取り組むものとしている。



「みなさん通り」上機式

地域連携

医療圏の人口密度の低さ及び今後の人口減少と少子高齢化を踏まえた上で住民が安心できる医療の提供を行うためには、地域連携の取り組みが不可欠である。ここでは、これまでに実施されているいくつかの取り組みを紹介する。

●病院群輪番制(令和4(2022)年度まで)

医療圏における一次、二次医療体制の整備を図るため、南三陸病院、気仙沼市立病院、猪苗代病院(気仙沼市)の3院で輪番制により休日・夜間等の重症救急患者の受け入れを行った(令和4年度に猪苗代病院が閉院したため中断)。

●修学資金貸付制度

安定した地域医療の提供のため、看護師をはじめ医療職を目指す学生に対し修学資金を貸し付ける制度を創設。学校等を卒業後、貸付期間の2倍に相当する期間を南三陸病院での業務に従事することを条件に返済が免除される。

●産科セミオープンシステム

産婦人科医の不足等の理由により、平成12(2000)年度から旧公立志津川病院の産婦人科は休診していたが、新病院には非常勤の産婦人科医を配置して婦人科を設置。妊婦健診を実施可能にし、分娩期は健診記録を共有しながら石巻赤十字病院につなぎ機能分担を行う産科セミオープンシステムを採用した。

●地域医療復興事業補助金

医療人材確保のため、看護師の研修等の費用として交付を受けた。

●一般社団法人みやぎ医療福祉情報ネットワーク協議会(MMWIN)への参加

ICTを利用した地域医療連携を進めるため、平成23(2011)年11月に設立されたみやぎ医療福祉情報ネットワーク協議会に参加している。

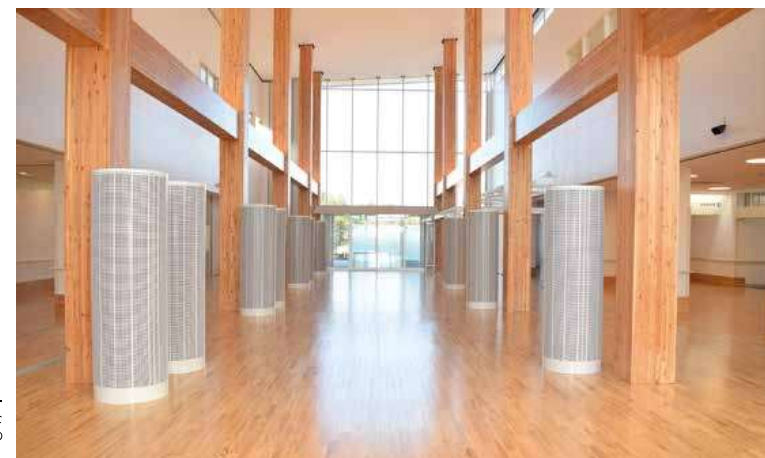
新病院建設の資金調達と中華民国紅十字会(台湾赤十字)

南三陸病院の建設にかかる費用は約56億円に上ったが、うち約22億2千万円が紅十字会(台湾赤十字)を経由した台湾の皆さんからの寄付金だった。地域の病院が消滅することを想定した補助金が国に整備されておらず、資金調達が困難を極める中、日本赤十字からの紹介があり応募したところ採用され、多大な支援を受けることとなった。町長や各産業団体・病院関係者などが台湾を表敬訪問、「台湾ありがとうキャンペーン」を行ったことをきっかけに相互交流が活発化し、国際教育旅行の受け入れも始まり、令和元(2019)年には受け入れ生徒数が1,000人を上回った。

落成式で、石碑「絆〜台湾の皆さんありがとう」にて握手
(平成27年11月25日)

病院を訪れた台湾の高校生(平成28年1月)

2F：一般病棟と療養病棟のケアミックスが特徴的で、急性期治療空間としての稼働を高めるため個室率を40%にしている。療養病棟は生活環境を重視し、病棟リハビリテーションも配置。



みなさん通り：
病院と総合ケアセンター
のエントランスをつな
ぎ、町民が集う憩いの
場としても機能



外来中待合：南からの光が降り注ぎ明るい中待合



4 床室：
将来の備
慮したシ
面。一日
を感じら
境を実現



透析室：独立運営も可能な B1F に配置



子育て支援センター



自衛隊の協力により旧病院から新病院に入院患者を移送（平成27年12月14日）

【南三陸病院】

所 在 地	〒 986-0725 宮城県本吉郡南三陸町志津川字沼田 14 番地 3
入院病床数	90 床（一般 40 床・療養 50 床）
診 療 科 目	内科（循環器内科）、外科、整形外科、小児科、 耳鼻咽喉科、眼科、泌尿器科、皮膚科、婦人科、 歯科口腔外科
電 話	0226-46-3646（代）

【総合ケアセンター南三陸】

所 在 地	〒986-0725 宮城県本吉郡南三陸町志津川14番地3
入 居 組 織	保健福祉課、保健センター、地域包括支援センター、子育て支援センター、地域活動支援センター「風の里」、ボランティアセンター、南三陸町社会福祉協議会
電 話	0226-46-2601（保健福祉課社会福祉係）



第1章 安心して暮らし続けられるまちづくり

3. 安心を実感できる保健・医療・福祉のまちづくり

2. 総合ケアセンター南三陸と地域福祉計画

- 南三陸病院との一体整備で総合ケアセンター南三陸を開設した。
- 保健福祉分野の機能を集め、ワンストップでのサービス提供を可能にした。
- あらゆるセクターや多世代の住民が連携して地域福祉を実現することを目指している。

「総合ケアセンター南三陸」の開設とその理念

震災前に歌津・志津川両地区にあった保健センター及び志津川地区にあった子育て支援センターと福祉作業所が津波により流失あるいは全壊と甚大な被害を受けた。それらの機能を至急回復するために、平成24(2012)年4月、歌津と志津川のそれぞれで保健センターが仮設での供用を開始した。

本格的な再建に当たっては、「医療・保健・福祉の一体整備」を目指し、新設の南三陸病院に併設して「総合ケアセンター南三陸」を建設、病院と同時に平成27(2015)年12月、開庁した。総合ケアセンター南三陸には保健福祉課、地域包括支援センター、子育て支援センター、社会福祉協議会、障害者地域活動支援センター等が入居し、町の保健福祉の拠点となっている。

地域福祉を構成する「健康づくり」「児童福祉」「障害者福祉」「高齢者福祉」等は分野別に割り切ることはできず、相互に連携して取り組むことによってより高い効果が期待できる。複合整備をすることで、町民の暮らしを支える地域福祉の拠点としてワンストップでサービスを提供できるようになったと同時に、良質な相談体制づくりや関係機関との連携により、全ての町民の暮らしを支え続ける環境づくりに取り組んでいる。



病院との間にある「みなさん通り」より見たケアセンター側。みなさん通りは町民が集う憩いの場であり、ラウンジやイベントなどに活用されている。



保健福祉課事務室。みなさん通りに面し、ワンストップサービスに対応している。



子育て支援センターは、採光あふれる地域の育児支援拠点

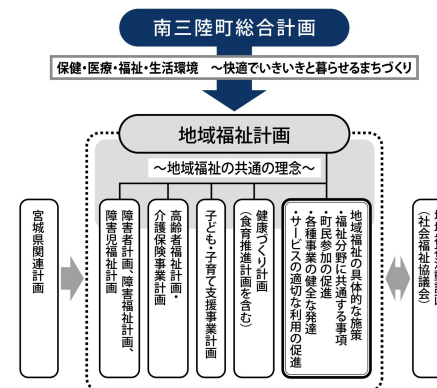
南三陸町地域福祉計画の改定

町では社会福祉法に基づき、平成20(2008)年度から24年度までの5年間を計画期間として第1期地域福祉計画を策定していた。しかし、震災によって平成25(2013)年の改定が叶わず、総合ケアセンター南三陸が稼働して2年が経ち復興の道筋がようやく見えてきた平成30(2018)年3月に第2期地域福祉計画を策定した(令和5(2023)年度)。第2期地域福祉計画では、「地域福祉は町民、行政、民間団体、企業、関係機関の協働で実現するもの」という考えから、全ての町民が支援の担い手であり、支援を必要とする全ての町民を支援の対象としている。

計画の基本理念は「みんなで助け合う地域づくり～地域で自分らしい生活を安心して送れる 南三陸町～」である。復興が進むことで新しい地域コミュニティが形成され、個人や家庭を取り巻く環境は変化し続けている。そうした中で、町民同士の支え合い活動や地域コミュニティ活動など多様な主体の活動を活性化し、相互の協力と連携を進めることによって、全ての町民が地域

コミュニティの一員として尊重し合い、「誰もが暮らしやすい、これからも暮らしたい私達のまち」の形成に向けて取り組む環境をつくることを目指している。

■地域福祉計画の位置付けと体系



みんなの居場所・ささえあいの拠点 結の里

総合ケアセンターが建つ高台の一帯には、災害公営住宅や集団移転によってできた住宅地が広がっている。これらに囲まれるようにして、デイサービスや居宅介護事業、福祉に関する総合相談窓口サービスを提供する「結の里」が平成30年にオープンした。

「結の里」は、生活環境が大きく変化した住民に孤立や引きこもりが起こることを防ごうと、町保健福祉課、復興事業推進課とUR都市機構が意見交換をして打ち出した「福祉と住まいの連携構想」に基づき、復興住宅及び集会所とともに計画された。

南三陸町社会福祉協議会が整備・運営者に認定され、「町民の誰もが安心して暮らせるよう、福祉、生活支援サービスを提供するとともに、子どもから高齢者まで気軽に集まって交流したり、お互いに支え合うことのできる地域づくり」を目指して運営を行っている。結の里では常に住民目線で多世代が気軽に交流できるスペースを設置し、イベント等を開催している。



結の里(外観)

糸で作った手作りの看板



小学生がメインの駄菓子屋さん。

月曜日の朝市! 見守りも兼ねています。



全町域から参加した「走らない大運動会」